



1-3. マスク入れ作りワークショップでは、参加者一人一人に小バサミや両面テープなどの道具を用意。初心者でも簡単に作ることができる。2. 紙袋はあらかじめ、開いて26×26cmの寸法にカットしておく。絵柄の切り方で見慣れた紙袋も新鮮に見える。4&5. マスク入れ製作ワークショップは、「We Base 鎌倉」の地下1階ラウンジにて、毎週木曜と土曜に開催。誰でも無料で参加できる。6. 紙袋を利用したマスク入れ。唯一無二の作品に愛着がわく。縁には補強がされ、マチがついているので丈夫で開きやすい。7&8. 木村さんの作品で、名刺入れと折財布。紙袋とは思えないほどの完成度。9. 板チョコの箱を利用した手帳型スマホカバーは、チョコレートメーカーとコラボレート。海で拾ったさくら貝をモチーフにしたタイプも。10. 木村さんと活動をともにする前田 理さん。11. 「食堂コバカバ」の入り口に設置されたマスク入れ。ここからアップサイクルの輪が広がる

Shonan Sustainable Action

日本エコロジーアップサイクル協会

[にほんエコロジーアップサイクルきょうかい]

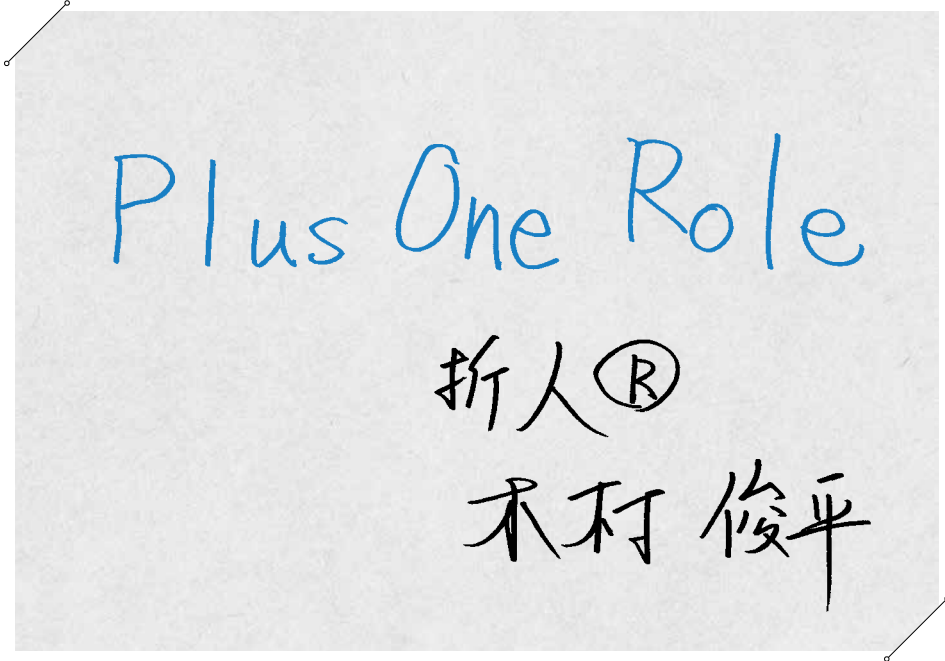
アップサイクルという言葉がまだ知られていない頃から、捨てられてしまう紙袋を利用して名刺入れや財布を作っていた木村俊平さん。2019年にNPO法人を立ち上げ、より多くの人にアップサイクルを知ってもらう活動を続けている。

Photo/K.Hayashi Text/Y.Masumoto

data
080-8042-7768
<https://euj.org>

profile
木村俊平さん

NPO法人日本エコロジーアップサイクル協会理事長。アップサイクルクリエーター（ブランド名「折人」??）。アップサイクル技術を使い、身近なゴミを減らす活動を行っている



木村さんは鎌倉で週に2回、マスク入れを作るワークショップを行っている。材料は使い終わった紙袋。寸法を測り、折ったり切り込みを入れたり、両面テープで貼り合わせたり、アドバイス通りに手を動かしていくと、世界で一つのマスク入れができて上がる。折り返して表面に出る絵柄により、思いがけない表情になるのが面白い。カメラメーカーでエンジニアをしていた木村さんは、もともと手を動かして何かを作ることが好きだったそうだ。通っていたコピーショップの紙袋が家にたまり、これを捨ててしまうのはもったいないと、見よう見まねで紙袋を開いて財布を作るように。試行錯誤を繰り返すうちに作品のクオリティも上がり、人に伝えたいと思うようになった。

「ひよんなことからそのコピーショップで紙袋利用のワークショップをするようになったんです。作品のバリエーションも広がって名刺入れや手帳型スマホカバーなども作るようになり、開催場所も増えました。そのうちに、捨てられたダンボールを素材に財布を作る島津冬樹さんの活動を知り、アップサイクルやSDGsと言う単語を意識し始めましたね。」

それから一般社団法人を設立して「折人」を名乗り、より活動がしやすいようにと2019年にNPO法人を立ち上げた。コロナ禍での需要もあり、今メインで行っているのが、マスク入れ制作のワークショップだ。

「私たちが行っている活動は、地球温暖化といった大きな問題の前にすれば、ごく小さな一歩にすぎないかもしれませんが、でも簡単に作れるマスク入れだからこそ誰でも参加でき、参加することでゴミに対する意識が変わるはず。これまでもみんなで作ったマスク入れは鎌倉のさまざまな飲食店に提供しており、「食堂コバカバ」には1000を超える数を収めたそう。お店でそれを手にとった人にも、何らかの気づきがあるはずだ。」

今後の課題は、布やビニールなど、素材を紙以外のものにも広げていくこと。そして、実際に手を動かして、廃棄される素材に新しい価値を与えられる人材を増やすことだと木村さん。今回寄せてくれた言葉「Plus One Role」には二つの意味がある。一つは、「ゴミになってしまいうものに役割をプラス」。もう一つは「それをやってくれる人に役割をプラス」。その思いは確実に広がっている。



布を作る島津冬樹さんの活動を知り、アップサイクル